

「石橋」考

——『梁塵秘抄』三二四番を中心に——

雨野弥生

一、はじめに

何れか清水へ参る道、京（極く）だりに五条まで 石橋よ、東の橋詰四つ棟六波羅堂、愛宕寺大仏深井とか、其れを打ち過ぎ
て八坂寺、一段上りて見下せば、主典大夫が仁王堂 塔の天下
降り末社、南を打ち見れば 手水棚手水とか、御前に参りて恭
敬礼拜して見下せば、此の滝は様がる滝の、興がる滝の水

（新日本古典文学大系『梁塵秘抄』三二四番 *引用文中の傍

線は稿者による、以下同）

現在残っている『梁塵秘抄』本文中でもっとも長編の今様として知られる『梁塵秘抄』三二四番（以下、「三二四歌」とする）は、五条の「石橋」が謡い込まれる点でも注目されてきた。たとえば日本歴史地名大系『京都市の地名』『五条大橋』の項で、三二四歌を

根拠に「平安末期には石橋が架けられていたらしい」と言及されるほかに、『図説上杉本洛中洛外図屏風を見る』^②「キャブション」五条橋と鴨川に「木の橋として描かれているが平安時代末期の『梁塵秘抄』には石橋として登場する」と解説される。また『梁塵秘抄』

以外の文学作品においても、「五条橋」注釈上で『梁塵秘抄』の「石橋」は無視できない存在となっており、『古事談』（新大系）三一八一で「梁塵秘抄によると平安末期には石橋であった」、『平治物語』（新大系）中巻「義朝六波羅に寄せらるる事 付けたり 信頼語（新大系）落つる事 並びに 頼政平氏方につく事」の「五条の橋」注で「梁塵秘抄二に「何れか清水へ参る道、京極くだりに五条まで、石橋よ」とあり、当時は石造りであったか。また、石橋となったのは、この後の造作とも」と注される。また、辞典類に目を移せば『角川古語大辞典』「いしばし（石橋）」の項において、「石造の橋」をさ

す語釈の用例として、この三―四歌が挙げられる。

このように、広いジャンルにわたって「五条石橋説」の論拠となってきた『梁塵秘抄』三―四歌であるが、一方で、当の『梁塵秘抄』研究においては、この「石橋」の解釈はまだ決着を見ていない。近年の主要な『梁塵秘抄』研究における「石橋」注釈を挙げると、旧大系で「五条橋付近か」、新潮集成・新大系・新編全集で「未詳」、『梁塵秘抄全注釈』^③で「石づくりの橋でもあつたか。未詳」、ビギナズ・クラシックス日本の古典『梁塵秘抄』^④で「本今様は、「石橋」「深井」「主典大夫が仁王堂」など、現在はよくわからないものも含まれる」とあるように、おおかた未詳とされている。

また、「五条橋が石橋になつたのは徳川時代である。(中略)して見ればこの「石橋」は徳川時代の傍注が摺入したものと考へられるのである」とされたのは荒井源司氏^⑤であるが、一方で、特に五条橋に注目し、そこに王城の境界性ないしは結果性が映し出されていることを考察された永池健二氏^⑥は、この五条の「石橋よ」という記述について、「五条まで、石橋よ」とあるから、当時、鴨川に架かる五条の末の橋は石橋だったのであろう」「いまは本文をも尊重して、石橋が存在したものと解しておきたい」と、少々いぶかしみながらも、文字通りに五条に石橋が架かっていたという説に立つておられる。

『梁塵秘抄』の「石橋よ」という記述は、このように本文尊重の立場から、多くは文字通り「石造りの橋があつたか」などとされ、都市史や他作品の注釈にまでも波及してきたが、長らく疑問視されてきた。もし平安末期の段階で、五条の橋が石造の橋だったとすれば、「日本の本格的な石造アーチ橋は長崎の眼鏡橋（一六三四年。橋長二三メートル）（『日本大百科全書』）」とする橋梁史・技術史的な見解と矛盾が生じる。また平安京都市史の側から見ても、天正十七（一五八九）年に豊臣秀吉が架橋させた三条橋をもって、平安京における石橋の嚆矢としてきた一般的な理解とも整合性がかさず、すっきりしない。仮に五条橋だけが、平安末期に早々に石橋の形にされたのならば、それはそれで都市史全体からみた意義を問い直さなくてはならない。

また、五条橋は、『梁塵秘抄』後の記録をみる限り、中世を通じてたびたび洪水で流されている。さらに、室町時代末期に描かれたとされる『洛中洛外図屏風』においては、五条橋は粗末な板作りの木橋として描写されている。仮に、『梁塵秘抄』の院政期も早々に五条橋が石造りとなり、それが道行の名所として書き付けられたものだとすれば、その後の時代に木橋に逆戻りしてしまうのも、少々腑に落ちない。

稿者は以前、新聞のコラム上でこの問題を取り上げ、『万葉集』

の例から、『梁塵秘抄』の五条の石橋が、鴨川にあった「飛び石」のことを指す可能性があると指摘した^⑦が、限られた紙面上での指摘にとどまっている。そこで本稿は、資料的根拠によつて「石橋」を再検証することで、三三四歌が描こうとしたものを読み取ることを目的とする。

二、五条橋が現れる資料からの検討

まず、『梁塵秘抄』が成立したと考えられる時代、すなわち平安末期の、五条橋の状況から検証する。五条橋（清水寺橋）が現れる、中古中世の文学および歴史資料を網羅的に抽出した拙稿「五条橋をとりまく空間認識と文芸——清水の向こうに見えるもの」^⑧により、ひとまず検討する年代を平安中期から鎌倉初期に限定して五条橋が資料上に出現するものを洗い出すと、以下のものが見られるが、いずれも「石橋」が石造りであったと確定できる記述は見られず、また、文脈上、五条橋の材質を特定するに足る資料も見あたらない。

① 橋造りたる聖の、河原にて橋の会すべしと聞きて行きたれば、
「制ありとて清水にてなんする」と言ひしかば、うち詣つとて

けふをこそ嬉しきはしと思ひつれ渡し果てずはいかさまにせ
ん（『赤染衛門集』三三三番（和歌文学大系））

② 於清水寺橋（河原）、有迎講事、住醜醐山聖人行之云々、予

為結縁参向、即帰了、（『水左記』承暦四（一〇八〇）年十月八日条、史料大成）

③ 清水寺橋供養也。（新訂増補国史大系『百鍊抄』保延五（一一三九）年六月二十五日条）

④ 清水寺橋（鴨川）。同六月十五日癸酉供養之。洛中貴賤知識

造之。少僧都覚誓為□□於本寺宝前修之。（群書類従『濫觴抄』保延五（一一三九）年六月十五日（二十五日カ）条）

⑤ 水殊深□□□車有恐、仍渡清水長橋、帰洛之時水減、仍渡

河、（増補史料大成『山槐記』保元三（一一五八）年七月七日条）

⑥ 霖雨及洪水、祇園清水寺等橋皆流損了云々、（増補史料大成

『兵範記』嘉応二（一一七〇）年六月一日条）

⑦ 清水寺に詣でて、深更の時帰路せしむ。橋の上に「唯円教意

逆即是順、自余三教逆順定故」と云ふ文を誦する音あり。（新大系『古事談』卷三 八十一）

⑧ 清水寺へ百日参りて、夜更けて下向しけるに、橋の上に、「唯円教意、逆即是順、自余三教、逆順定故」といふ文を誦する声あり。（新編全集『宇治拾遺物語』六十五（卷四ノ十三））

⑨ 甚雨洪水、東洞院北行、五条東自清水橋ク、メ地路也（国書

刊行会『明月記』建仁二（一一〇二）年五月十三日条）

⑩ 辰時許出京参日吉、(粟田口路甚悪、仍自清水橋方如例向ク、メチ方) (国書刊行会『明月記』建仁二(一一〇二)年六月二十一日条)

⑪ 昔、清水の橋の下に、薦にてあやしの家居せる者の、昼は市に出でて、さかまたぶりといふことを立てて、物を乞ひて世を渡るありけり。(新大系『閑居友』上七)

⑫ 風吹雨澤。洪水泛滥。四条。五条等末橋流了。漂流之輩数輩云々。(新訂増補国史大系『百鍊抄』安貞二(一一二八)年七月二〇日条)

⑬ および⑫など、水害によって流出したという内容の記事からは、その時点の橋が木造であったことがうろじて想像されるものの、これらの資料をもって早急に『梁塵秘抄』の「石橋」との接点を見出すことはできない。

三、『万葉集』における「いしはし」

五条橋が文献に現れる本文中から橋の状況を検証する方法では、橋の形状にまで言及できない。そこで、ひとまず「五条」という場所を離れて、「石橋」という表現のほうに注目したい。なお、該当箇所は竹柏園文庫本では「いしはしよ」と表記される。従って、検証の手段として、この表記を尊重し、以降、まずは「いわはし」

などは検討の外に置いた上で、「いしはし」と訓じた文献によって論証を進める。

まず、『万葉集』には「石橋」が数例現れる。たとえば一一二六番は以下のようである。

年月もいまだ経なくに明日香川瀬々ゆ渡しし石橋もなし(新編全集)

一一二六番歌について、『梁塵秘抄』に比較的近い書写と考えられている諸本の訓を検討すると、平安時代書写とされる「元暦校本」で「いしはし」^⑭、また同様に平安時代書写と考えられる「類聚古集」でも「いしはし」と訓じていることが認められる。この一一二六番の「石橋」は、代表的な注釈によれば、「川の中に置き、踏み渡る飛び石(旧全集)」「川を渡るために配置した飛び石。ここは恋人の家に通うための石橋でもあったか(新潮集成)」「明日香川のあちこちに渡して置いた飛び石伝いの橋(新大系)」「川の浅瀬に置き、その上を踏み渡る飛び石(新編全集)」「流れの中にくっつかの石を置いて作った橋(佐竹昭広ほか校注、岩波文庫)」「川を渡るための飛び石(伊藤博訳注『新版万葉集』、角川ソフィア文庫)とあり、現在のところ「飛び石」として解釈されている。つまり、平安時代に「いしはし」と訓まれた『万葉集』の例が、「飛び石」と解釈されるということになる。

同様に、『万葉集』の三二五七番は以下の本文である。

直に來ずこゆ巨勢道から石橋踏みなづみぞ我が來し恋ひてすべ

なみ(新編全集)

本文の訓みを検討すると、やはり平安時代書写と考えられる「元暦校本」「天治本」「類聚古集」で「いしはし」と訓じられている。こ

の「石橋」は、近年の解釈によると「川の中に点々と並べ渡した飛び石(旧全集)」「浅瀬を渡るための飛び石(新大系・岩波文庫)」「

川の中に点々と並べ渡した飛び石(新編全集)」「飛石(角川ソフィア文庫)」とあり、やはり「飛び石」と解される例である。特に

『類聚古集』は『梁塵秘抄』とほぼ同時期の平安後期書写と考えられており、そこでも飛び石を「いしはし」と訓んだ例があるという

ことから、『梁塵秘抄』においても、「いしはしよ」の「いしはし」が「飛び石」を指していた可能性は充分に考えられる。

四、万葉集以降平安時代までの文学における石橋の例

さて、ここまでは平安時代書写の『万葉集』の例から、「飛び石」を指すと解釈できる「いしはし」の例があることを確認してきた。

もちろん、『万葉集』の「いしはし」に「飛び石」という意味が見られるからといって、即、『梁塵秘抄』の「いしはし」にも当てはめられるとは限らない。そこで本節では、慎重を期するため、さら

「石橋」考

に、平安時代のほかの「石橋」という語から「飛び石」以外の意味も広く検討した上で、最終的に『梁塵秘抄』三一四歌における妥当な解釈を探りたい。

四一、「飛び石」の意と解釈できる「石橋」例

管見に入った平安時代の文献に現れる「石橋」の語は、私見によれば、大きく三つの意味に分類できる。以下に、一つ一つ確認する。

まずその一つ目は、これまで見てきた『万葉集』の例と同じく、

「飛び石」を指すと見られる例で、『万葉集』のほかに、源順による

『和名類聚抄』(承平四(九三四)年前後成立)などに見られる。

「石橋 爾雅注云缸(音江和名以之波之 石橋也)」(高山寺本)¹⁴⁾

周知の通り、まず中国の辞典『爾雅』によって意味を示してから、万葉仮名で日本語の読みを表しており、「いしはし」と読んで「缸」すなわち飛び石の意味があったとわかる。なお高山寺本は、『梁塵秘抄』とほぼ同じ院政期の写本である。

また、『類聚名義抄』(平安末期成立)の次の例も、飛び石を意味する「缸」の字が、「いしはし」とよまれている例として挙げるこ
とができる。

・「缸(略)以之波之」(図書寮本)¹⁵⁾

・「缸(略)イシハシ」(観智院本)¹⁶⁾

なお、図書寮本は、周知のとおり書写は永保元（二〇八一）年を遡るものではないとされる。^⑦一方、観智院本の書写年代は建長三（一二五二）年で、この二つの写本の中に『梁塵秘抄』が成立したことになる。つまり、『梁塵秘抄』成立年代の前・後ともに、「いしはし」は、「飛び石」の意味を保持し続けているとひとまず考えて良い。従って、成立時期が図書寮本と観智院本の間にあたる『梁塵秘抄』においても「いしはし」に「飛び石」の意味があったという蓋然性は、非常に高いといえる。

四一二、「石の階段」の意と解釈できる「石橋」例

ところで、主に平安時代成立と見られる文献中の「石橋」を見渡すと、明らかに「飛び石」とは解釈できず、「石の階段」と解せる例が見られる。仮に、これまで見た「飛び石」を第一義とした上で、以下に挙げる「石の階段」であろうと解せる例を、第二の語釈としておく。

第二の語釈「石の階段」と解せる例には、まず『新撰字鏡』（僧昌住、昌泰年間（八九八～九〇〇年）に成立）がある。院政期の天治元（一二二四）年書写である「天治本」では、

「磴 丁鄧反、登也、橋階也、石波志」^⑧

とあり、「登」「階」とあることから、階段状のものという意識があ

ると認定できる。

また、『蜻蛉日記』中巻において、

「二丁のほどを、いしはしおりのほりなどすれば、ありく人こうじて、いとくるしうするまでなりぬ。」（喜多義勇『全講蜻蛉日記』底本は宮内庁書陵部桂宮本）

とあるのも、文脈から、飛び石ではなく階段状のものといえる。

しかしながら、『梁塵秘抄』三一四歌の本文に戻ると、『梁塵秘抄』の例は「石橋」のあと、鴨川をはさんだ「東橋詰め」に行く文脈となっており、「石橋よ」が鴨川の河原の「階段」を指すとは読み取りにくい。そこで、この「石橋」第二の意味である「石段」の意味は、『梁塵秘抄』の解釈上では排除して良いと考えられる。

四一三、「小さな石の架け橋」の意と解釈できる「石橋」例

ところで、平安時代の文献には、これまでのような「飛び石」や「石の階段」という意味では解釈できない例もある。『権記』寛弘八（一〇一一）年九月五日条には、

「又依警固間陣座□小庭有平張、々々之中立胡床、官人等可候也、宣理自平張參進、又出入之時踏石橋二三足、先例踏片□失錯非一、事了大臣退出敷政門、右大臣留□後、内大臣共出、（違例云々、）左大臣於宣仁門下被示（略）」（増補史料大

成)

という文中に「石橋」が見られる。『日本国語大辞典(ジャパナンレッジによる)』第二版では、『権記』のこの文を「いしばし【石階】(1)石でつくった階段。石段。いしのはし。いしのみぎざはし。』の用例として挙げている。しかしながら、この『権記』に出てくる「石橋」とは、階段状のものではなく、たとえば『年中行事絵巻』別本巻二「左近陣図」に見られる、小さな板状の石を架け渡した橋として解釈できるのではないか。『年中行事絵巻』「左近陣図」(図1)では、右手前に、「石橋」と書かれた、小さな石の架け橋が描かれる。「石橋」という書き込みは、必ずしも作図と同時期のものとは限らないが、陣座周辺を描いた院政期の図にこのような形状の橋が渡されていることは、平安時代の儀式中に見られる「石



図1 『年中行事絵巻』より「左近陣図」
(中央公論社『日本の絵巻』より転載)

橋」を考える上で、参考になる。

古記録を見ていくと、このように、庭や内裏にあった小さな石の架け橋ではないかという例が散見される。たとえば、『小右記』の治安元(一〇二二)年二月二十一日条では、

「余即着陣南座、只仰史令進例文並硯等、…史致任撤筥退出之間於石橋下落筥、居筥取加笏退出、大夫也、挿腰笏往古不落事也、」(大日本古記録)

とあり、陣から史が退出する際に、史が石橋のところで笏を落とし、たことがうかがえる。

これと同様、陣よりの退出で史が同じ経路をとる例は、その後の記録にも見られ、たとえば『岡屋関白記』嘉禄元(一二二五)年二月三日条にも著陣において

「則史退去、史渡石橋之程取笏、」(大日本古記録)

とある。時代はさらに下るが『深心院関白記』建長七(一二二五)年六月二十五日条においても

「退出、史渡石橋之程取笏、」(大日本古記録)

という、『岡屋関白記』とほぼ同文があり、著陣において史が陣を退出ののち、石橋を渡るといふ経路は、平安時代から鎌倉時代を通じて固定していると見られる。『岡屋関白記』『深心院関白記』にあるように、石橋を渡るところで笏を取り直すというのが本来の式次

第一となっているところでありながら、『小石記』のほうでは笏を落としてしまったということになるだろう。先ほどの『年中行事絵巻』に戻ると、この「石橋」も、陣からの退出経路上に渡されていると見られる。『年中行事絵巻』でみる限り、小さな板状の石を架け渡した橋という形状であったと考えて良く、形は飛び石でも階段状でもないことから、これは、平安時代の「石橋」の、第三の意味と分類することができよう。

なお、平安時代の古記録に見られる、儀式中の「石橋」が、必ずしも全て、第三の意味の「小さな石の架け橋」だったとはいえない。たとえば『愚昧記』承安元（一一七一）年正月七日条では、

「内弁召式部丞、々昇石橋参上、膝行進兀子辺、内弁以左手給下名、」（大日本古記録）

とあり、石橋は「昇」るものとなっている。ここまで見てきた古記録で、石橋を「渡」とあつたのとは異なる。これについては、『江家次第』巻一「元日宴会」の下名の式次第に、

「二省丞来立、〈近代昇自階不可然、壇下置少石踏之昇也〉」

（増訂故実叢書）

と割注があり、元来は壇の下に置いた「少石」を踏んで昇っていたが、階より昇るようになったという変遷があつたようである。

さて、このように、資料的根拠によって、平安時代の文献に見ら

れる「石橋」を、第一に「飛び石」、第二に「石の階段」、第三に「小さな石を架け渡した橋」に分類した上で、『梁塵秘抄』に戻る。三一四歌の「石橋」は、どの意味となるであろうか。前述のように第二の意味は三一四歌の文脈からは排除され、また、鴨川の川幅からして第三の意味も考えにくい。蓋然性が高いのは、第一の「飛び石」の意味と考えられるであろう。

平安時代の文献を検する限り、『梁塵秘抄』の「いしはし」とは、「飛び石」を意味していた可能性が高い。

五、『宇治拾遺物語』の「石橋」例の再検討

さて、ここまでの検討で、『万葉集』の平安時代の写本や、平安時代の文献に見られる「石橋」を総合的に確認した結果から、『梁塵秘抄』の解釈の上では、「飛び石」がもつとも当てはまることを確認してきた。ここで次に、院政期の「後」の文献にも「石橋」という言葉に「飛び石」の意味が読み取れる例を挙げる。「飛び石」の意味が院政期の後まで通底して継続的に見られることを確認しておきたい。

『宇治拾遺物語』五七話「石橋の下の蛇の事」では、雲林院の菩提講に行く途中、女が「石橋」を踏み返したところ、石の下の蛇が解放され、女の後をつけるという話が展開する。

「この近くの事なるべし。女ありけり。雲林院の菩提講に、大宮を上りに参りける程に、西院の辺近くなりて石橋ありける。水のほとりを二十余り三十ばかりの女、中結ひて歩み行くが、石橋を踏み返して過ぎぬる跡に、踏み返されたる橋の下に、斑なる蛇のきりきりとしてみれば、石の下に蛇のありけるといふ程に、この踏み返したる女の尻に立ちて、ゆらゆらとこの蛇の行けば、(略) この女の尻を離れず歩み行く程に、雲林院に参り着きぬ。」(新編全集)

諸注とも、「石橋」には特に何の注記もされておらず、文字通り「石造りの小さな橋」のように受け取られかねない箇所である。

しかし、ここで注目したいのは「石橋を踏み返」す直前に、「中結ひて歩み行く」という女の様子がわざわざ書かれていることである。「中結ひて」は、「衣が足にまつわりつかないように、衣を少し引き上げ、腰の辺に帯を結ぶ着方(新編全集注)」、「衣を少し引き上げて帯を腰の中段に結ぶこと(新大系注)」とされるが、なぜ、そんな仕草がわざわざ描かれるのであろうか。

ここで「石橋」が、文字通りの「石を架け渡した橋」ではなく、「飛び石」の意であったと考えてみれば、女は飛び石を渡る前に、石と石の間の飛距離を考えて「中結ひ」、つまり帯を締め直したということになり、この箇所の文脈は、より鮮明になる。仮にもし、

単に「板状の石を架け渡した橋」であれば、歩幅がさほど変わるとは思えず、ここで敢えて「中結ひ」と書かれた文の意味が通りにくくなってしまう。「飛び石」を前にして、歩幅が広がることを想像したからこそ、女は衣を引き上げたのであろう。このように、「石橋」の解釈を厳密にすることで、『宇治拾遺物語』のこの場面の映像も、より具体的になる。

『宇治拾遺物語』の本文は、それ以前の『宇治大納言物語』などの表現が書承された可能性も高いが、この「石橋」を「飛び石」とする解釈が、本説話においても受け継がれ当てはまることから、『宇治拾遺物語』以前の成立である『梁塵秘抄』の時代においても、石橋を飛び石とする意味は保持されていたと考えられる。

六、「よ」の意味から見た本文解釈

ところで、この三二四歌で、「いしはしよ」の「いしはし」が飛び石だとすると、それは本文解釈にどのように波及するのか。この「石橋よ」は、仮に石造りの橋であれば、「(立派な)石橋だなあ」「(なんと)石橋があるよ」という詠嘆としてのニュアンスでも通るが、飛び石とする場合、どのように解釈されるか。ここで、国語学の成果を援用して本文を検討したい。

『日本国語大辞典』(第二版)の整理によれば、間投助詞(終助詞

に分類されることも)の「よ」には、大まかに二つの意味があるとされる。一つは、文中の用語や終止した文・体言止めの文を受けて「感動をこめて聞き手に働きかけ、また念を押すのに用いられる」用法で、もう一つは、「体言を受けて、呼び掛けを表わす」用法である。しかしながら、三二四歌の文脈では、石橋に向かって呼びかけているとは考えにくい。残るは詠嘆か、念押しの用法である。

もし仮に、「石橋よ」の「よ」が詠嘆の意となるには、先に述べたように三二四歌自体が石橋を目にした直接体験的な文脈となろうが、三二四歌には「愛宕寺大仏深井とか」の「とか」という語が現れ、これは『梁塵秘抄』の成立年代から考えて例示並列の用法ではなく、「不確実な想像または伝聞を表す(日国第二版)用法と考えられる。「とか」は、「不確かな引用」から「例示並列」へと変化したことが知られ、ここは近年の岩田美穂氏のまとめによれば「話者自身が直接はつきりとは知らないが、聞いたことがある、見たことがあるといった不確定的な意味」²⁰⁾が年代的に該当すると考えられる。つまり、「過去に見聞きしたことを他者に伝えるという文脈で用いられ(岩田氏)」、伝聞的な気持ちが働いているといえるのである。そこから「よ」の意味は、ある人が一人称的・体験的に石橋を見て「石橋だなあ」「石橋があるよ!」というように感動・詠嘆を表したものである。他者への「念押し」の意味、すなわち「石橋がある

よ」「石橋ですよ」というニュアンスであると考えられよう。²¹⁾
なお、「:ですよ」と念押しする意の「よ」にあたる例は、以下のように『梁塵秘抄』の前後の時代にわたって見られる。

・『紫式部日記』「いま一間にゐたる人々、大納言の君、少将の君、宮の内侍、弁の内侍、中務の君、大輔の命婦、大式部のおもと、殿の宣旨よ。」(新編全集)

・『源氏物語』(紅梅)「そのころ、按察大納言と聞こゆるは、故致仕の大臣の二郎なり、亡せたまひにし衛門督のさしつぎよ」(新編全集)

・『今昔物語集』(巻三ノ二十一)「仏ノ宣ハク、『其ノ女コソハ汝ガ家ノ屎尿ノ穢浄ツル女ヨ。』」(新大系)

・『増鏡』(第二・新島守)「我こそは新島もりよ隠岐の海の荒き浪かぜ心して吹け」(旧大系)

外村南都子氏22)をはじめとじてこれまでも指摘があるように、三二四歌は寺社への参詣の旅を語る道行歌謡であり、「何れか清水へ参る道」と始まることからも、道中で見落としてはいけない地点を盛り込んでいると考えられる。三二四歌の「石橋よ」は、京の北側から鴨川に並行して下ってくる中で目に見える物を歩行者の視線を想定しながら描き出しているといえるが、歩いているだけでは見落としがちな石橋、すなわち飛び石を渡らないとならないこと

を、念押ししているのではないだろうか。

この石橋を見落としてしまうと、清水に行くための洛外への出入り口から外れることになる。『梁塵秘抄』では「〇〇へ参る道」型の歌謡が五首あるが、三二二番の「下り松」「実らぬ柿の木」、四一九番では「七曲」「崩坂」といった、名前からして「奇異な形」あるいは「險路」が想像される、いわば異空間を踏み越えて、靈驗所にたどりつく点が特徴的である。これらは、道中で鑑賞すべき立派な名所・景物というより、洛中から出た後に見落としてはならない目印として機能している。見慣れない異形を想起させる名称によっても、うっかり見落とさないように注意喚起する意識があるといえよう。

橋が流れてしまった後に残された橋の支石の連続、すなわち飛び石を「いしはし」と表現したものと想像すれば、この石橋は、うっかり見落としがちな形状であるばかりでなく、「崩坂」「下り松」のように、本来的な姿からすれば異形であり、非日常を踏み越えて行く印象をも持たせる。そしてそれは、都の人々にとって、歌枕のようなおぼろげな遠景ではなく、名実ともに存在の実感が共有される都の身近な「実景」としての異空間であった。

七、まとめ

本稿では、『梁塵秘抄』三二四歌の「五条まで いしはしよ」について、主に『万葉集』から鎌倉初期頃までの文献資料を用いて、再検討を行った。平安中期から鎌倉初期の五条橋界限が現れた文献資料からは、管見の限り五条橋の材質に触れた資料は見あたらず、何度か流されているので石造りではないことが推測できる程度であり、院政期の五条橋の材質を確定する根拠とはならない。そこで、文献上で、「いしはし」という訓みの側面から検討を行うと、『梁塵秘抄』に近い平安時代の書写と考えられる『万葉集』に、「飛び石」を意味すると考えられる「いしはし」という訓の例が見出される。また、「石橋」という言葉が現れる平安時代の文献を洗い出すと、それらはおよそ、「飛び石」「石の階段」「小さな石を架けた橋」の三種に分類できる。五条橋界限の状況から推測するに、『梁塵秘抄』の「石橋」は、いわゆる石造りの石橋ではなく、この三種のうちの「飛び石」の意であった蓋然性が高い。また、『梁塵秘抄』の時代の後にあたる『宇治拾遺物語』にも、「飛び石」と解釈したほうが良いと見られる「石橋」の例が見られ、『梁塵秘抄』成立の時代の「石橋」という語に「飛び石」の意味が存在してもおかしくない。助詞「よ」「とか」の意味からも、ここでは道行歌謡ならでの

「第三者に土地の情報を伝えようとする意識」「念押しする意識」があると考えられる。よって、『梁塵秘抄』が謡った「石橋よ」は、見落とすことができない五条の飛び石を、都から清水へ向かうための経路の目印として、また参詣のために踏み越えなければならぬ隘路というイメージをも内包しつつ、謡い込まれたものと考えられる。

注

- ① 底本では「京」の下に空白があるが、本稿では従来の説に従い「京極くだり」と解釈することとする。
- ② 『図説上杉本洛中洛外図屏風を見る』小澤弘・川嶋将生、河出書房新社、一九九四年
- ③ 『梁塵秘抄全注釈』上田設夫、新典社、二〇〇一年
- ④ ビギナース・クラシックス日本の古典『梁塵秘抄』植木朝子編、角川学芸出版、二〇〇九年
- ⑤ 『梁塵秘抄評釈』荒井源司、甲陽書房、一九五九年
- ⑥ 永池健二(「王城」の内と外——今様・靈験所歌に見る空間意識)『日本歌謡研究』第二七号、日本歌謡学会、一九八八年七月、後に『逸脱の唱声 歌謡の精神史』(集社、二〇一一年)に所収。なお、このほか五味文彦氏も三二四歌について「石橋とはあっても、石ですべてが出来ていたのではない」とする(『梁塵秘抄のうたと絵』文春新書、二〇〇二年)が、具体的な形状については、それ以上には言及されていない。
- ⑦ 二〇〇六年七月二十一日「全国農業新聞」掲載の拙稿コラム「弁慶と牛若丸」。なお、石橋が飛び石を指す可能性については、その後、植木朝子氏の「書評 永池健二著『逸脱の唱声 歌謡の精神史』」(『奈良教育大学 国文——研究と教育』三三五号、二〇一二年三月)があり、本稿とは少々立場を異にする部分もあるものの、石橋を「石を飛び飛びに置いたものや平たい一枚石を渡したのもの」とする解釈の可能性に言及しておられる。あわせて参照されたい。
- ⑧ 『説話・伝承学』一六、二〇〇八年三月
- ⑨ 佐佐木信綱編『原本複製 梁塵秘抄』好学社、一九四八年
- ⑩ 以下、『万葉集』諸本の書写年代は岩波文庫『万葉集』二(佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注、二〇一三年)巻末所収の「諸本解説」に従った。
- ⑪ 『元暦校本万葉集』勉誠社、一九八六年
- ⑫ 『類聚古集』臨川書店、一九九二年発行縮刷新版
- ⑬ 注⑪・⑫に同じ。また天治本は『校本万葉集』巻七(岩波書店、一九七九年)
- ⑭ 『和名類聚抄 古写本声点本本文および索引』馬淵和夫、風間書房、一九七四年
- ⑮ 『図書資本類聚名義抄 本文影印解説索引』勉誠出版、二〇〇五年再版発行
- ⑯ 『天理図書館善本叢書 類聚名義抄 観智院本 法』八木書店、一九七六年
- ⑰ 『古語大辞典』巻末付録解説、小学館
- ⑱ 『新撰字鏡 増訂版』京都大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店、一九七九年
- ⑲ 日本の絵巻、中央公論社、一九八七年、九四頁
- ⑳ 岩田美穂「例示並列形式としてのトカの史的変遷」(『日本語複文構文の研究』ひつじ書房、二〇一四年)

⑳ 「よ」の役割については森野崇「平安時代における終助詞「よ」の機能」(『秋草学園短期大学紀要』第十一号、一九九四年)、富岡宏太「対象事態の提出——中古和文における体言下接の終助詞ヨについて」(『國學院雜誌』二〇一四年五月)。

㉑ 「中世歌謡と、修行の道行」——早歌を中心として『日本歌謡研究』一九九四年三月

(付記) 本稿は、二〇〇六年七月二十一日掲載「全国農業新聞」拙稿コラ

ム「弁慶と牛若丸」(その後、『異界百夜語り』(堤邦彦氏・橋本章彦氏編、三弥井書店、二〇一四年)に所収)を基とし、大幅に改稿したものである。成稿にあたり、第六回「都市風俗画研究会(人間文化研究機構連携研究)」(二〇一四年十一月八日、於日本女子大学)における発表の席上、大高洋司氏、小島道裕氏、真島望氏、藤川玲満氏はじめ出席者の諸先生方より貴重なご意見を、また別途、植木朝子氏、館野文昭氏、嶋本尚志氏、杉山俊一郎氏よりもご教示を頂いた。ご意見を賜りました先生方に、あつくお礼申し上げます。